

花 き

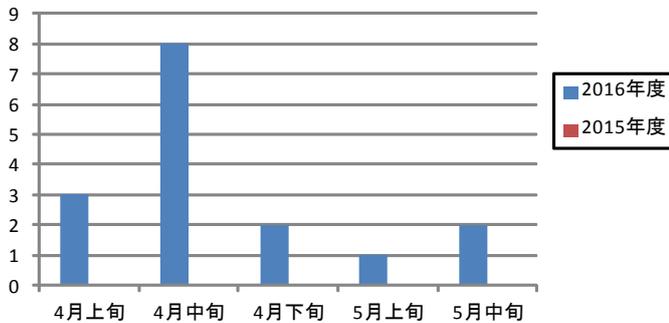
実 況

1 キク

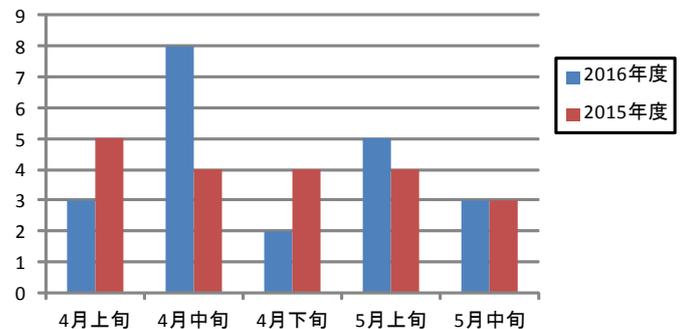
奥越の秋植え夏ギクの草丈は、5月20日調査で無摘心の「あかね」(小・赤)で81cm(51cm)と生育は昨年より早く、草丈も長い。その他の品種についても概ね昨年より生育が良好である(図1)。また「あかね」は5月下旬(昨年6月上旬)からの出荷が予想される。ただし、5月3日には最大瞬間風速25.3mの強風が吹き、大野東～大野南管内で茎折れ、マルチめくれ等の被害がみられた。この日以外にも断続的な強風に5月中旬まで見まわれ、「ひづる」、「白霧」等の品種に被害が見られた。



写真1 茎折れしたコギク(阪谷：5/10)



平均風速4m/s以上の日数比較(大野市AMEDAS)



平均風速2m/s以上の日数比較(大野市AMEDAS)

9月咲きギクの定植は、5月下旬に行われた。

10月咲きギクは挿し芽が5月中下旬に行われた。害虫ではナモグリバエが全域で発生が見られ、少～中発生となっていたが、5月16日現在では、ほぼ終息した。カスミカメムシ類の被害は5月上旬からみられる。キクスイカミキリは例年よりやや早く4月下旬から被害が見られ、5月中旬がピークであった。「釣船」に被害が多かった。

白さび病は山間部の一部で微発生である。黒さび病は勝山の山間部に微発生、褐斑病は全域で見られる。他にダニ類、キクスイカミキリ、ハマキガの被害が散見される。

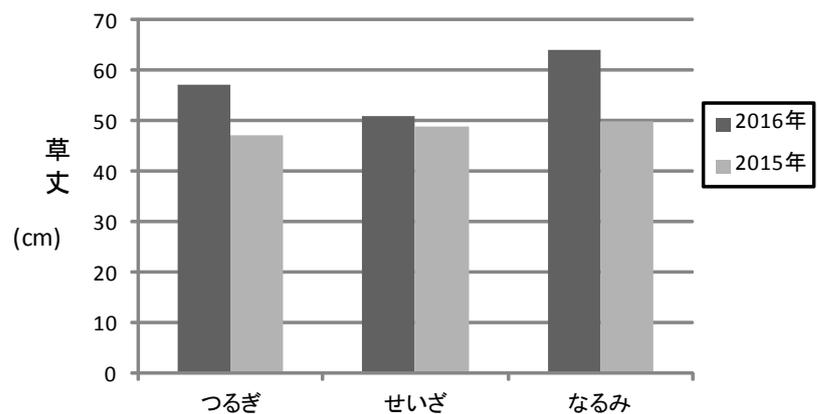


図1 2016年と2015年の草丈比較(5月13日)

福井市東郷の6月咲き品種の「春風」(小・黄)、清風(小・赤)の収穫が開始された。7月咲きの定植が4月22日～25日に行われた。早期開花対策として、本年はエスレル対策を徹底している。5月上旬に摘心を行った「小鈴」の草丈は4～7cmであった。大土呂の盆ギクの定植

は4月17日に行われた。4月24日に摘心、エスレル処理は行っていない。草丈は「小紫」が8cm、「恋心」13cm、「玉手箱」7cm、「小鈴」10cmであった。病虫害ではスリップス類、アブラムシ類の被害が見られる。

あわら市の秋植え夏ギクは35～65cm(5月13日調査)、病虫害では褐斑病、白さび病がみられる。ハウス栽培の「川風」(小・白)は5月7日頃開花、草丈96cm、葉数52枚、花蕾数15輪、「春風」(小・黄)は5月中旬開花始め、115cm、45枚、21輪、「清姫」(小・赤)は5月1日開花始め、103cm、49枚、11輪であった。

越前市では、5月15日調査で8月咲きの「はじめ」「恋心」「小鈴」は3月20日～3月25日に挿し芽(昨年3月21日～3月25日)が行われ、4月7～11日に定植し4月21日に摘心した(昨年同時期4月14～15日に定植し4月25日に摘心)。「小鈴」は草丈18(8)cmと昨年より良好傾向である。ハモグリバエ類とカスミカメムシ類は地域全体で見られ微発生である(昨年は5月21日調査)。

丹生の春植え8月咲きギクでは、5月16日調査で4月7日～14日に定植し(昨年4月13日)、4月下旬に摘心を行った。「小鈴」は5cm、「シューペガサス」4cm、「やよい」6.5cmであった。「かなえ」、「小雨」は11～13cmとやや大きい。病虫害では、ハモグリバエ類、アブラムシ類、アザミウマ類がみられる。9月咲きギクは5月15日(昨年10日)から定植を開始した。

二州の4月中下旬植えの8月咲きギクは、5月16日調査で、草丈は「くれない」が5.4cm(昨年6.6cm)、「水鳥」が3.3cm(昨年6.0cm)、「翁丸」が5.3cm(昨年7.0cm)とやや生育が遅い。ハモグリバエ類、白さび病の発生が認められた(昨年5月20日調査)。

若狭の露地の暮れ植え夏小ギクの草丈は、「はなふさ」76.0cm(昨年75.8cm)、「はるき」62.6cm(昨年78.6cm)で蕾が立弁と昨年より7日程度早い。ただし、「清風」の草丈55.8cm(昨年68.0cm)と生育が遅かった。春植え盆咲きは4月13日より定植を開始した。「くれない」が草丈5.0cm(昨年5.0cm)、「翁丸」が11.3cm(12.2cm)、「しらかば」が7.8cm(9.0cm)と昨年並みである(5月17日調査、昨年は5月21日調査)。病虫害は、「あやめ」等に白さび病、多くの品種でハモグリバエ類の被害が見られた。

2 ユリ

奥越のシンテッポウユリ「オーガスタ」の生育は葉長10～12cm、葉数3～5枚である(5月13日調査)。中芯球の草丈18cm、葉数22枚で、葉枯病が微発生である。

永平寺町の「レッド」は、4月初めから開花が始まり、5月10日頃まで出荷した。

春江町の9月7日定植の「ブラックアウト」が草丈64cm、蕾数4.8輪、3月26日定植の「クリスタルブランカ」が草丈58cm、葉数57枚で、球根養成として栽培していた「カサブランカ」は5月3日の強風時にハウスを締めきり、葉の多くが日焼けの被害を受けた。病虫害ではアブラムシが少発生である。

あわら市の「レッド」は5月12～22日頃開花し、草丈108cm、蕾数6.7輪、葉数77枚であった。病虫害では、一部の圃場にアブラムシ、葉枯病が発生している。シンテッポウユリは「F₁オーガスタ」「雷山二号」「さきがけ雷山」が導入されている。各品種2千本が5月1日に定植されたが、5月4日の強風による植え傷み等で生育はやや悪い。



写真2 あわらのリリブライトレッド(5/10)

3 スイセン

葉の枯れ上がりは、平年よりやや早い。促成栽培用球根の掘り上げが昨年同様5月20日頃から開始された。

4 トルコギキョウ

あわら市は抑制栽培の切り下株の草丈が5月13日時点で30~40cm(昨年40cm)と、昨年より若干生育は劣る。一部の養液土耕圃場は定植後の活着が悪かった。実生苗は草丈10~15cm、葉色はやや薄い。病虫害では灰色かび病が少発生、炭そ病が微発生である。

福井市の4月14日定植の「バルカンマリン」10cm、6対葉、「バルカンリップス」7cm、5対葉、下旬定植では草丈3cm前後である。

大野市では、5月16日調査で4月20日に定植されたロジーナブルー2~3対葉で、大部分の株が抽だいを始めている(昨年5月19日調査)。

南越では5月16日調査で「モレットマリン」「ボヤージュグリーン」の4月下旬(20~25日)定植作型で草丈5cmである。また、昨年7月に定植された「ボヤージュグリーン」等の二度切目の株で草丈44~52cm、13~15対葉、11月中下旬作型の「ボヤージュグリーン」が草丈80cm、16対葉である。葉先枯が中発生である。

二州では、5月16日調査で(昨年5月21日調査)、10月下旬定植の「アンジュラベンダー」が草丈13.2cm、葉数8.4対葉、「プラチナキング」13.4cm、8.4対葉、「あすかの吹雪」15.4cm、8.6枚であった。1月14日播種、4月16、17日定植作型で、「ブルーシルエット」「ピンクシルエット」で4~5対葉。美浜町では3月22日播種苗の生育が悪い。

若狭では5月16日調査で(昨年5月21日調査)、1月定植の「ココ」「キキ」で6~7対展開葉である。下位節からの側枝の発生が目立ち、2月の低温で生長点部が障害を受けた可能性がある。10月中旬定植作型では5月11日調査で、「シャララピンク」が草丈70~80cm、開花ははじめである。「ピンクシルエット」が草丈30~35cm、「あすかのそよ風」35~40cm、圃場のECが高いため、株たちが多い。

5 その他

奥越のシャクヤクは5月12日が目揃え会で、平年よりやや早い(昨年5月10日)。出荷先は福井、なにわ、金沢市場である。勝山のシャクヤクは平年並みで、干ばつにより草丈は短い。

奥越のアリウムギガンチュームは21日調査で花茎長80cm(昨年80cm)、花の直径は4cmとなっており着色が見られ、出荷は5月18日から開始された(昨年5月15日調査)。

永平寺町のヒマワリは、3月上旬播種、母の日に出荷されていたが、5月17日で終了し、開花不良株が若干みられた。3月下旬播種の「ビンセント」は草丈130cm、蕾径2.5輪、「サンリッチ50」が100cm、蕾径3cmで収穫間近である。あわら市の「ビンセントオレンジ」は2月中旬播種で5月上旬開花し、金沢方面に出荷されている。

若狭のカンパニュラ「鈴姫」は、草丈60~75cmで4月上旬より開花している。「メイ」シリーズは草丈100cm、5月上旬から開花している。



写真3 高EC圃場。コケが多い(二州)



写真4 葉の丸みが強く、大きい株はややECが高い圃場に多い(若狭)。

対 策

1 圃場の排水徹底

梅雨期、雨が多く降ると畝溝に滞水し根腐れをおこし、下葉の枯れ上がりや生長の低下等により出荷量が低下するので、次の対策を行う。

- 1) 畝溝の排水、水の通りを良くするため、溝さらえや除草を行う。
- 2) 畝溝と直角に交わる集水溝を畝の両側（できれば圃場周囲）に必ず設け、排水溝に落とす。すでに設置してある場合は清掃や除草を行う。
- 3) 排水溝が高く排水しにくい場合は、雨の時に強制排水を行うため、排水溝の端に集水桝を設置し、ここからポンプで強制排水を行う。
- 4) 7月咲の暮れ植えギクの場合、滞水が続くと根の活性が低下するので、通路や肩の土を削り、地際に土寄せする。この作業により新根発生が促されるため、生育が向上する。
- 5) 過湿気味の圃場で栽培された花卉は日持ちが悪くなりがちであり、キクではいちょう病の発生につながるため、極力、上記の対策を励行する。



写真 5 排水不良圃場。入梅前に対策を行う。

2 秋植え夏秋ギクの管理

- 1) 花芽分化後の乾燥は、花卉の伸びが悪く小輪となるため、中輪品種では乾燥させないように注意する。
- 2) 花芽分化後（開花の 40 日前）に、止め肥として 10 a 当たり窒素成分で 5kg 程度を、畝の肩部分に施用し、肥料の分解と上根の発根促進のため、土寄せを必ず行う。特に高温期はガス害の懸念もあるため、速やかに土寄せする。
- 3) 止め肥施用後、降雨が多い年は生育後半に肥料が切れる。葉色が落ちた場合は OKF-1、ハイポネックス等の 500～1000 倍で葉面散布をするが、白さび病や褐斑病がみられる場合は施さない。
- 4) 中輪品種では発蕾始めに花首の伸長を抑制するために施設栽培（雨よけ栽培）でビーサイン水溶剤 80 を 10a 当たり 500～5000 倍液 50～150 ㍓を茎葉散布する。伸びやすい品種は 1000 倍程度で茎葉散布を行い、確実に効かせる。

3 梅雨期の病虫害防除

1) キク白さび病

気温が 25℃ 以下の湿潤な時期に発生する。草丈 50～60cm まではジマンダイセンフロアブルやコロナフロアブル等で 1 週間に 1 回の予防散布をする。散布時期は雨前が基本であるが、発病が多い場合は、雨の止み間に、チルト乳剤 25、アンビルフロアブル、マネージ乳剤や、ストロビルリン系（ストロビーフロアブル、これらは品種によって薬害の恐れがあるので他剤の混用を行わず、展着剤も加用しない）の治療剤を散布するが、同一系統の連用による耐性菌の出現に注意する。ハチハチ乳剤も白さび病に登録があるが、散布後の冬孢子堆の変色がわかりにくいいため、効果判定に注意する。

2) キクのアザミウマ類

苗を新たに導入した場合は特に注意して防除する。キクを加害するアザミウマ類はミカ

ンキイロアザミウマ、ミナミキイロアザミウマ、ヒラズハナアザミウマ、クロゲハナアザミウマ、ネギアザミウマ等の各種があるので、種を確認した上で効果や抵抗性を考慮して薬剤を選定する。特に圃場での切り残し花が発生源となるので早期に除去する。

ミカンキイロアザミウマはキクのえそ病(TSWV)を媒介するので特に発生に注意する。

3) キクのマメハモグリバエ

5月中下旬から優占種がナモグリバエからマメハモグリバエに変わる場合が多い。葉に対する食い込みが多くなると枯れ上がりやひどくなるため、初期防除を徹底する。マメハモグリバエは幼虫が黄色で、幼虫はさなぎになる前に葉から落下し地中やマルチ上でさなぎとなる。5～7月に発生が多い。発生予察は黄色粘着シートで可能である。

4) ユリ葉枯病 (ボトリチス菌)

花芽分化期以降、葉枯病に感染しやすく、圃場排水が悪い条件では特に発生が多くなるので防除を徹底する。雨よけ栽培を行うと発生は少なくなる。露地栽培では出荷の30～40日前、施設で50日前までは、セイビアフロアブルやダコニール1000等の保護殺菌剤を、1週間に1回散布する。発病を認めたら、発病初期にアフエットフロアブル、ポリオキシシAL水溶剤等の治療剤を散布する。展着剤は、保護殺菌剤には展着剤なしで散布するが、施設栽培では汚れ軽減のため界面活性剤系の展着剤を用いる。

4 促成スイセンの花芽分化促進処理

- 1) 高温処理開始までに球根の表皮が親指の腹で簡単にむけるくらいに十分球根を乾燥させる。
- 2) 高温処理は2週間行う。
- 3) くん煙処理は高温処理後にモミガラを1日3時間の割合で3日間燃やして行う。
- 4) 処理後は植え付けの7月下旬まで、風通しのよい納屋や車庫などで保管する。
- 5) 腐敗した球根は取り除き、7月末日ぐらいをめどに定植する。

5 トルコギキョウの葉先枯れ症

- 1) トルコギキョウの葉先枯れ症は、極端な水分ストレスにより、カルシウム欠乏となり、生育中期に上位葉の葉先が褐変や萎縮し、ひどい場合には心止まりになる。組織中にカルシウムが少ない品種は出やすく、障害を受けやすい傾向にある。
- 2) 昼温が高いほど発生しやすくなるので、ハウス内の換気に努める。ハウス内の空気が動いている場合は発生が少ないとされるため、内気扇も有効である。
- 3) 発生しやすい品種については、花芽分化の時期を中心にカルプラス等を数回、葉面散布する（定植約1カ月後から出蕾期までの間、週1回散布するとよい）。ただし、灰色かび病、炭そ病が発生した圃場では施さない。



写真6 カルシウム欠乏による葉先枯れ症

6 梅雨期の切り花出荷

梅雨時期に出荷する場合、出荷箱内での花や葉から、ムレにより灰色かび病等による荷いたみが生じやすいので次のことに注意する。

- 1) 収穫前にハウスの換気を十分に行う。
- 2) 露地栽培の切り花を、降雨時に収穫した場合は、茎の下を持って振り、花卉の間や葉にたまった水

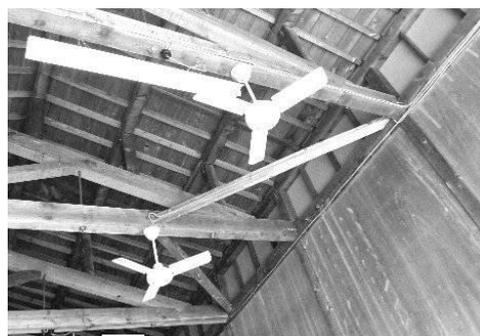


写真7 天井設置の攪拌扇

を極力取り除く。

- 3) 収穫後に切り花の基部を水中で切り戻し、水揚げを円滑にする。「水切り」等によってできる、切り下の茎や葉はいけ水に溜まらないようにする。いけ水は頻繁に交換して新鮮なものを使う。
- 4) 収穫後、箱詰めまでに花全体が乾くように風通しをよくする。咲きすぎた花は調整時に除く。エアコンの除湿運転や扇風機等で花をできるだけ乾かす。
- 5) 出荷箱に詰めてからも、出荷間際まで箱をあけておき、花全体をできるだけ乾かす。



写真 8 自作の水揚げ機材の例
プランターと送風機を組み合わせたもの